

## 特集

問い直そう、保育の中のアたりまえのこと4

### 幼児期の「仲良し」ってどんなと？



座談会

「仲良し」とは？「仲」は、「にんべん」に「中」ですから、人間関係をそのまま一文字に凝縮したような文字。まさに、さまざまな人々の真ただ中で育っていく人間、ケンカや独りぼっちなども経験しながらの「仲」探しを一生続けていきます。そういう人間の初期、幼児期の「仲良し」とはどのようなものか考えていただくという企画です。発達心理学者として、人間が「わたし」という存在にどう目覚め育てていくのか、そのプロセスにある他者・環境との関係性を研究されてきた岩田純一先生をお迎えし、現場でのエピソードをもとに語り合っていました。

(編集委員会)

岩田純一(北陸学院大学教授)

伊集院理子(お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)

菊地知子(お茶の水女子大学講師)

## 仲良しとして認められることと個の存在感

菊地 今回のテーマを聞いて、感じられたことをまずお話しただけだと思います。

岩田 遊びのいざこざで「仲良し違う」って子どもはよく言うね。「仲良しなんだから（けんかはやめなさい等）」と先生が言うと、「仲良し違う」と。次の日にはころっと仲良くなっていて、先生が「もうそんな仲良くなっているの?」と言うと、「いいよお」と、昨日のことなど忘れたかのように遊んでいる。そういうふうにして仲良しの関係を更新していく中で、本当の仲良しになる。違う者同士だから、遊びの中でも当然ぶつかり合う。けんかをしながらもそ



▲岩田純一氏

の中で自分とは異質な仲間に出会って、本当に仲良しの関係になっていく。

仲良しっていうのは、仲間から仲良し

として認められる、承認されるということで、共同生活をする子どもにとって大事な問題です。

仲間と自分は考えていることも要求の内容も違う。もともと異質なわけです。要求や欲求も違う異質な仲間との中で、仲良し関係をつくっていくには、当然対立したり葛藤する要求の中で、自分も相手も両立していく、そういうような折り合いをつけていく方法を見つけていかなければならない。それはしんどいこともある。そういうしんどい模索の結果、自分のやりたいことを実現したいという欲求と、仲間と一緒に遊びたい、仲間から遊びの仲良しとして承認されたいという欲求の両立を何とか図っていくとする。当然それは、しばしば自分の思うとおりにはならないという楽しい負の部分の半面として背負うわけです。しかし、そういう道を模索していく中で仲良しの関係ができた時に、その中で自他が鍛えられていく。

だからこそ、保育の中で子どもが一緒に遊んでいるから「仲良し」と、単に表面的に見るのではなく、

どういふような関係で結び付いているのかを見る必要がある。それが共依存的なペアの閉じた関係にとどまっているのか、仲間として認められ好かれたいためにひたすら仲間と同調し、仲間の言いなりになっている関係なのかを。

相手も自分も両立するような、そういう仲良しの関係がクラスの中でできていることが、仲の良い遊びの友達だけではなく、好きや嫌いを超えて仲間と協同して遊び、活動していく集団作りの基盤になつていくのではないか。そのように協同して活動する中で、自分の知識や技能によって仲間から認められる、または、そこで自分が必要な存在であることを実感する、お互いの良さを認め合う、そういう協同的な集団の関係を築く土台になつてくる。

**伊集院** A男は、年少・年中時代、一人でいることの多い、マイペースな子どもで、何となく興味はあつてもお友達がたくさんいるところに入れない。その子が、お山で何人かが本当にたわいもない穴掘りをしている時に、仲間の分もスコップを持ってきて

くれた。それで、皆の分持つてきてくれたんだよ、と穴掘りをしている人たちに教師が伝えた。今まで一人で孤独に遊んでいることが多かった子が、仲間のために持つてきたということを教師がしっかりと認め、友達にも伝わるようにしてあげたいなと思つた。こんなにスコップ持つてきてくれたよ、と伝えるとき、仲間も、「ありがとう」という感じになり、A男には、仲間にも認められたうれしさがあつたらしく、それだけがきっかけではありませんが、仲間のところに入つていけるようになった。

仲間として認められるつていうことが、個の存在をしつかりさせていくには必要で、個の存在がしっかりとしていれば閉鎖的な関係にもなつていかない。二人の関係であれ、四、五人の関係であれ、大きな集団であれ、いろいろな関係性の中で一人ひとりが存在感をもつて、そしてお互いを認め合えるようになれるかと思ふんですね。

**岩田** 個として認め合いながら、仲良しの関係をつくつていく。個としての存在感を生かした仲良しの

関係作りは大切ですね。仲間から仲良しとして認められたいという気持ちが年中児にはしっかりとあると思う。子どもにとって仲間から個としての存在を認められることが大事なことで、だからそれを逆手にとって、お前は仲良しじゃない、もう遊ばない、と脅すようなことがあるのも年中児です。

### 教師の見極めや働きかけ

**伊集院** 関係のほうに気持ちが向いていると、自分を見失う。自分が本当に何がしたいのかっていうのがわからなくなる。そうやって遊ぶ相手にこだわっている時には、個に立ち返って、あなたは、誰と遊びたいのか、ではなくて、何がしたいのか、と問うことはあります。そういう中から、自分というものをもう一回見つめ直してもらって、これをしようと思う、と言ってきたら、それは〇〇ちゃんたちがやっているから一緒にやってみたら、という感じで伝えてみます。

**岩田** したくないのに、仲良しと認められたいために

自分の要求や感情を殺して仲間と同調してしまう子がいる。その時に、先生が言われるように、自分では何がしたいのって投げかけてあげる働きかけも大切ですね。

**伊集院** 共依存的関係、というあたりでは、初めはとっても意気投合してすごく楽しそうにしていたのに、そのうちそれがなれ合いのようになっていくと閉じてきてしまったり、ぎくしゃくしたように感じられる、ということが、ついこの間もありました。他の子と遊びたいなって気持ちが芽生えていても、「そんなことしたらもう遊んであげない」と口走られてしまったり。それで「そういう時は違うお友達と遊んでみたら？」って投げかけたことがあるんですね。したら、そうしようという感じで、一人の子は違うお友達の中に飛び込んでいった。もう一人

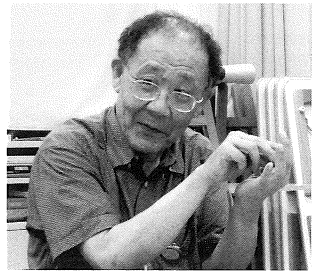


▲伊集院理子氏

の子はすぐには行けなくて、一人の時を過ごしていた。それも大事だと思うんですね。そこに揺さぶりをかけていく。時にちよつと別々なことをしてみたらどうだろう、というふうに投げかける。そうしていくことで、いつもいつもばらばらになつてしまふのではなくて、また意気投合して楽しく遊べたりするわけですね。風通しのいい前向きな関係性に開いていつてあげるような投げかけてというのが、協同的な活動を見通した上でも、大事なんじゃないかつて思うんですね。

**岩田** いつもわいわいと一緒に活動していれば、それが望ましい仲良し関係になつていゝとは限らない。一見すると、あまり活発に、人と一緒にわいわいはやらず、いつもは目立たないんだけど、みんなで何かしようとして、そこで困つたことが起こると、こうしたらどうや、と脇から面白いアイデアや工夫を提案する子がいる。特に年長にはそういうかわり方をする子どもが見られる。目立たない子なんだけれども、遊びの中でその子なりの存在感を發揮し、

クラスの中ではその存在を皆が認めている。そういう仲間との関係もあるわけよ。親和的な仲の良い数人の関係の中だけで仲良しとして認められるのではなくて、協同する活動の中で、好きや嫌いを超えたクラス集団の中でもその子は認められている。そこまで敷衍<sup>かえん</sup>して、仲間との仲良しの関係を考へていかなないと。



**伊集院** 個々の関係をどうしようこうしようというのではなく、個々の関係がいろいろありながら、でもつながり合つていて、皆がいろいろなことをして、クラス集団なり学年集団ができてゐる、というように、雰囲気というか、つながりをどういう形で広げていくかということが大事。

**岩田** 仲間と一緒に楽しく遊ぶには、いつも自分の思いどおりにはならないといった、自分にとつて楽しくない負の部分を負いながらも、それぞれの要

求のぶつかり合いの中で、互恵的に、それぞれの自己が育っていくような仲良しの関係をどうつくっていくてあげるのかが目指すところです。従って、自分の要求を押し殺し仲間と同調するという形での仲良しに見える関係は決して望ましくない。そうではなく、相手と自分の異質な要求間に折り合いをつけながら両立する方法を模索していく、といった負の部分を負い合うやりとりの中でこそ、それぞれの自己も鍛えられていく。その時、本当の意味で、相手も尊重し自分も尊重する仲良しの関係になる。そういう理想的な子どもたちの関係を、どのように保育の場の中でつくっていくかということに、保育者はいつも心を配っていかなければ。

**菊地** 負の部分を負うことなしには子どもだって孤立しますよね。幼児期の保育というのは、個と共同、両方の育ちを、切り離せないものとしてずっと考えている。保育の場で目指されていることを広げていけば、社会が良くなるようにさえ思えます。

**岩田** 異質な仲間とのぶつかり合いの中でこそ、子

どもの個と共同性は育っていく。

それから、独りぼっちで遊ぶことの意味の見極めも大切です。なぜ仲良しの関係ができず一人で遊んでいるのか、そのタイプはいろいろ違うから、その独りぼっちの遊びをどう広げていくか、どのようにその環境をつくっていくかも違ってくる。

**伊集院** C男という、ちょっと気難しいところがある子がいました。思考力のある、一人であることが多い子です。一人でいるというのも絶対いけないことではないと私は認めているので、じっくり読んでいるのねとか、じっくり考えているのね、と保証しつつも、やっぱりその子の良さがもつと人に伝わっていきえるようになっていくといいなと思っていた。その子に直接的に働きかけてお友達関係を広げてちょうだいっていうんじゃなくて、その子がやった事柄とか、その子がつくり出したものが集団の中で皆に共有されたり、認知されたりすることで、その子なりの特徴とか良さが認められるような集団になるといいな、と思っている。

**岩田** C男のやった事柄とか、その子がつくり出したものへの先生の取り上げ。先生の着目。そうすると他の子どもも「おやつ」とその子を見直す。あの子はそんなことを考えてたんか、って。

**伊集院** 面白かったのは、「うえのどうぶつえんごっこ」というもので、枠の中でただじっとしている。「何やってるか周りからは全然わからないよ」って言ったら、「上野動物園のウサギになっているんだ」と。それならもっと皆がわかるようにしようというところからごっこ遊びが始まったんだけど、同じようにウサギになる子、モモンガになる子、トラになる子、と、自分以外の子どもいろんな動物になってみたところでたくさんの人と交わる体験をして、友達に開かれていって、今では本当にお友達の中に入り込んでいろいろな人と関係をつくっている。それまでは、自分の興味のあることだけ一人でしていて、周りが何していいようが関係なかった。

**岩田** 自分の遊びの世界があっても、それをもとにして仲間へのかかわりの手を出すことが下手な子は、

そういうふうには先生が取り上げて紹介することによって、周りの他の子がかかわりの手を出してくる。それによって子どもたちの関係ができてくる。

**菊地** 黙ってたただウサギに「なっている」というのが面白い。

**伊集院** そして、どうしてわかってくれないんだ、みたいに怒っているの。わかるような道具なども何もつけないで。

**岩田** 周りの子がかかわりの手を伸ばせるように先生がうまく媒酌する。

**菊地** そうしたら他の子ども「なってみる」というのがおかしいですね。

**岩田** 関係が生まれてくる。周りの子どもから閉ざされていた殻を破ってもらおう。周りに手を伸ばすことが下手な子どもは、周りの子どもから手を伸ばし



▲菊地知子氏

てもらう。そういう中で子ども同士の関係も育っていく。だから集団っていうのは意味がある。手を伸ばしてもらう子どものほうにも伸ばす子どものほうにも。

### 隣り合う関係から

**伊集院** ある程度の質が保証されている集団の中でも、居続けられない子どもっていますよね。その子をどう居続けられるようにしていくかっていうことが、糸口になっていくと思う。

年長に、すぐに外れがちになるDという子がいる。お誕生日会で、年長は一部の人は年少さんを保育室まで送り、残った人で遊戯室の片付けをした。皆で長椅子を運んだり。片付けを一緒にやった人たちに、今日頑張つてやつてくれたみんな、ちよつと舞台の所に座つてと言つて座らせた。Dは、(座らなくて)いいって言っただけで、そんなこと言わないで、せっかくやつてくれたんだからとにかく座りましようつて言つて、とにかく座るように促したのね。居続

けられないで外れてしまうような子を、自分もそこで一緒にやつたメンバーだ、ということを意識してもらいたかった。

**岩田** いきなり一緒に遊びなさいじゃなくて、一緒に座るっていうことからね。だからDにとってしんどくない。一緒にいること自体。

**伊集院** それを積み重ねていくことをしたいと思つて座つたら、Dが、言いたいことがある、と。言う。いいよ、どうぞ、と促したら、「お疲れさまでした」と、ぱつちりその場に合うことを言つた。

**岩田** その子もそうだけど、周りの子も一緒の場に座ることでDの存在感をまさに間近に感じる事ができる。

**伊集院** そう。「いる」っていうことを感じる。それをわかりやすく感じさせるために、ちよつとした手だて、舞台に皆で座ろうつてことが、やっぱり大事なのかな。

**岩田** 舞台にはどのように座つたの？

**伊集院** 舞台の縁に並んで腰掛けた。



岩田 それはいいね。面と向き合うのではなく、同じ方向だったらDもあまり緊張することもなく楽ですね。まず横並びで仲間の存在を感じ取り、次には面と向き合う関係になる。そこから始めていく。

伊集院 そうなんですよ、段階を踏んでいかないと。まず横並びで皆と座ろうっていうところで。

菊地 まず隣り合わせて座るとか、お互いが人と居ることを感じる、という身体性ですね。

伊集院 そう身体性が大事。対峙で言い合いなどを求める前に、幼児期に横並びの関係をどれだけ保証していくか、体験的に重ねていくかが大事なのかな、と思う。それこそ並行遊びとか言いますが、それも横並びの関係。でもそれはつながっているという。

岩田 仲良しとは、子どもと子どもの身体的な関係性でもあるからね。

(二〇二一年七月七日)



\*紙幅の都合上、お話しいただいたことのごく一部の掲載となったことを、ここにお詫びいたします。

\*岩田純一先生の近著『子どもの発達の理解から保育へ―〈個と共同性〉を育てるために』(ミネルヴァ書房 二〇二一年)を併せお読みいただければ幸いです。